亀中だより

No.8　令和6年5月15日　文責　岡田

「伝えてみよう。わたしの想い！
聞いてみよう。あなたの想い！」
～ 第45回少年の主張全国大会より ～

令和5年11月12日に開催された国立青少年教育振興機構が主催する少年の主張全国大会の報告書が届きました。

この大会は、「中学生が日ごろの生活の中で感じた家族や友人、地域の人々に対する思いや感謝、あるいは感動をしたり、感銘を受けた経験、将来への決意などを自分の言葉で表現し、社会に向けて発表する場」（国立青少年教育振興機構理事長古川和さんの言葉より引用）として、昭和54年から始まりました。

今回はこの大会で「内閣総理大臣賞」を受賞した鳥取県米子市立東山中学校矢曳未来さんの「私が歩む夢への道」をご紹介します。生徒のみなさん、保護者のみなさん、ご一読ください。

国立青少年教育振興機構 第 45 回少年の主張全国大会 チラシより

「私が歩む夢への道」

鳥取県米子市立東山中学校　矢曳未来さん

私は障がいを持っている障がい者だ。生まれつきではなく、6年前に交通事故に遭ったことで後遺症が残ってしまったのだ。事故後のショックで歩けなくなった。記憶力が低下した。集中力が続かなくなり、些細なことで疲れて怒りっぽくなった。私はその後遺症を負ったことで、できないことが増えた。生活に関する不自由、勉強に関する不自由、その他色々なことで前の自分のほうが良かったと思う。最近は怒りの気持ちより、悲しみの気持ちが増えたように思う。

私には2つ上の姉がいる。私は今、中学校3年生だから、高校進学を考えたときに真っ先に頭に浮かんだのは姉だった。姉と同じ高校に行きたいと思った。けれど、それはとても難しい選択だと知っていた。私には障がいがあり、姉とは違うからだ。障がいを負ったことで、勉強に集中して取り組むことが難しくなり、できることよりできないことが増えた私に高校進

学なんてできるだろうかと考えた。今は自分の体の状態が少しずつわかってきたからこそ言えることだが、私には普通校進学は難しいのだろうと考えている。けれど、前は変わった自分を受け入れたくなかった。やれば私はできる。元のように戻れると考えていた。そう思って中学校に通ってきたが、今となってはそれも難しいということを知った。大きくなるにつれ、自分の体がわかってきたからだ。自分を知るというのは、辛いことなのかもしれない。
私は、そのことを理解したときから、なんだか体の力が抜けて悲しくなった。私は、もしかしたら小学校から中学校に上がるとき、事故に遭う前の自分に戻りたくて、姉と同じ東山中学校を選んだのかもしれない。
そんな理由で選んだ中学校だけど私は今、その選択をして良かった、幸せだと思う。なぜなら中学校に通っていると、先生たちが私を本当に大切にしてくれているということがわかるからだ。それは、私が今、何よりも欲している気持ちだ。また、中学校に通うことで、同級生と一緒に勉強をすることができた。勉強だけではなく、色々なことに挑戦させてもらえた。委員会活動や応援団に参加することができた。そしてこの 3 年間を通して、私は全てが全て融通が効くわけではないということも知ることができた。
私は大人になったら、支援学校や支援学級の教師になりたい。中学校の先生達が私を大切にしてくれているように、私も教師になったら、支援学校や支援学級の子供達を大切にしたい。生まれつきの障がいがあったり、体が不自由で普通校には通えなかったりする子供達に「あなた達には居場所がある、一人ではない」ということを知ってもらいたい。
そのために私は自分を見つめ、自分にできることを探していきたい。だから私は、高校は養護学校に行きたい。養護学校で自分の可能性を見つけ、自分にできること、誰かの役に立てることを探していきたい。
私は最初からこのような考えを持っていたわけではない。最近になってやっと「できない自分」を受け入れられるようになってきたのだ。小さい頃から頑固で、これだと決めれば、周りの人の言うことなんて聞かなかった。だから事故に遭って同年代の人達より、できないことが増えたということが、ものすごくコンプレックスだった。
けれど、もうそれは過去の話だ。今の私はこうなのだから仕方がない。この考えは、自分はできないと諦めたのではなく、自分を認めたのだ。私は、私なりの道を歩むことを願う。私は自分の歩幅でゆっくりゆっくり「私の夢」を叶えようと思う。目的地へ時間をかけて進んでゆくカタツムリのように。私の夢はどこまでも続いていく。

矢曳さんは「この作品を通して、これからどんな人生を作り上げていきたいですか？」という質問に次のように答えています。

「私は自分が障がい者であるからこそ、障がいを持つ人々の悲しみや将来への不安、また普段の生活での不自由について、より理解をすることができる。だから私は、養護学校に進学し、自分のペースで私の夢に向かって少しずつ努力していきたい。そして、特別支援学級や特別支援学校の教師になり、障がいを持ち、支援を必要とする人々の良き理解者になりたい」

確かに矢曳さんの言う通り、障がい者だからこそ障がい者の気持ちが理解できる部分もあるかもしれません。しかし、障がい者にしか理解ができないような社会であってはいけません。私たちは学校での人権学習などを通して、障がい者理解の学習を行ってきました。亀山中学校のみなさんが、ここでの学びを通して、社会の中で「生きづらさを抱えたすべての人への理解」と「ともに生きる社会の実現」に向けて実行力のある人へと成長していってくれることを願っています。